

教員紹介

言語学 —— 文系と理系の融合

ご自身の研究や教育観を語っていただく「教員紹介」。今回は平成20年4月に人間文化創成科学研究科文化科学系（文教育学部言語文化学科中国語圏言語文化コース）に赴任された、伊藤さとみ先生にお話を伺います。



Satomi Ito
伊藤 さとみ

仕事に就くのは「知性」ですが、 仕事を続けるのは「体力」です。

ご専門は？ それを選ばれたきっかけは？

専門は言語学で、中でも中国語文法が中心です。両親とも中学校の英語の教師をしていたせい、子どもの頃から英語が好きで、言語に関心がありました。大学では言語を機械的に構造分析していく言語学的手法に触れて、とても新鮮に感じられ、2年生の頃にはこれを専門にしようと決めていました。どういふ言語を主たる研究対象にするかは人さまざまで、学部の研究室の仲間たちも卒業論文を書くにあたって、太平洋のある島の言語だとか、シベリアの少数民族の言語だとか、あるいは反対に英語などの大言語だとか、いろんな言語を対象に選んでいました。私は、中国語がこれから世界で主要な位置を占めること

になると思ったので、中国語を主たる研究対象にすることに決めました。卒業論文以来、自然言語を人工的な言語の法則で記述できないだろうか、とか、言語に普遍的に内在する仕組みを見出せないだろうか、とか、そんなことに関心をもって、研究を続けています。

ご出身は？ 本学に赴任される前は？

福井市の出身で、大学・大学院は京都大学です。在学中は台湾に留学したりしました。琉球大学に中国語学の教員として赴任し、沖縄で6年間を過ごしました。



初めての東京の印象は？ 研究環境は？

とにかく東京はスピードが速いと感じます。お茶大は琉球大と比べて、とても忙しいです。でも「忙しい」ということを、私は悪いことだとは思っていません。東京は本もサービスも研究機関も同分野の研究者も、すぐに手に入ります。物質的・人的資源に加えて交通機関にも恵まれているので、仕事がどんどん進められます。それで忙しいんだと思うんですね。一方、琉球大ではその反対です。文献一つにしても、はるばると取り寄せなければなりません。だからスピードはゆったりとなります。同分野の研究者が身近にいない分、多少異なる分野の方たちと一っしょに研究したりもしましたから、そういうおもしろさがありました。ゆったりと視野を拡げられる時と、スピードを上げて専門性を深められる時と、その両方が交互に来るような研究環境が得られれば、最高ですね。

ご趣味は「体育会系」という噂ですが

いえ、そんなことはありません。でも小さい時から水泳をやっていたので、体を動かす生活というのは、私にとっては当たり前です。仕事に就くのは「知性」だけれど、仕事を続けるのは「体力」だと思っていますから、仕事を続けるために体力作りのできるスポーツを、と思っています。今はまっているのは、沖縄

で始めたパラグライダーです。パラグライダーは、風とか障害物とか他の人の飛び方とか、要はまわりの環境に配慮することがとても大事ですね。あとむずかしいのは、スタートのタイミングです。コーチから「今だ」と言われてそれから筋肉を動かしたのでは、微妙に遅いんです。自分で最適なタイミングを見切ることですね。東京に来てから忙しくて、あまりパラグライダーに行けなくなってしまいました。この頃はジムに通う程度です。

プライベートなことを伺ってよろしいですか？

実は1月に結婚したばかりです。夫も研究者ですが、専門は全く違います。出張や論文締切など、お互いに配慮しながらやっていきたいと思っています。まだ新しい生活のパターンができていないので、かなりエネルギーを使いますね。大学での仕事にミスが増えたような気がして、両立はやはり結構大変なのかな、と思ったりします。でも新生活をスタートさせるまで、煩瑣な手続きを二人でこなしていると、学会をマネジメントする時のチームワークに似ているな、と思いました。考え方の違う人間と一緒に暮らすということは、自分の見方を変えますし、お互いのやりとりによって、とても鍛えられると思います。

うわっ！ ご家庭でも「鍛える」んですか(笑)

いえいえ、やっぱりなごみますよ(笑)。結婚してみると、仕事も結婚もおもしろいと思います。私は仕事をいっぱいやった後で、「婚活」をやったわけですが、たぶん人それぞれの時期があるのだらうと思います、標準的な婚期とかではなくて。

お茶大生へのアドバイスをお願いします

琉球大の学生は堂々としていて、男女ともに表現がストレートでしたが、それに比べて、お茶大生は慎み深いと感じます。丁寧に礼儀正しく、物言いが柔らかく、よく気配りができていると思います。もちろんそれはよいことですが、でももうちょっと堂々としてもいいかな、と思います。みんな頭がよいのですから、もっと自信をもってもよいのでは？ 億劫がらずにいろんなことにチャレンジして、人に間違いを指摘されたら柔軟に対応して、それができれば、どんどん自信がついていくと思います。そして、できれば言語学に関心をもってほしいですね。言語学は女性研究者の活躍の多い分野なんです。ことに私がやっている形式意味論は論理学の一派なのですが、国内にも国外にも優秀な女性研究者が大勢います。「女性は論理的でない」などという俗説がいかにも根拠がないか、この分野にいと実感させられますよ。言語学は文系と理系が合体したような学問なので、私も学生時代からいろんな言語や、生物学・医学・数学なども勉強してきました。一つのことに集中してやってきた人に比べたら成果は少ないかもしれませんが、でもいろんな分野をあちこちかじっていると、それが思いがけないところで役立ちます。みなさんも何にでも興味をもって、いろんな勉学にチャレンジしてみてください。

教員紹介

言語学 —— 文系と理系の融合